

# 能動的想像について

齋 藤 眞

On Active Imagination

SAITOH Makoto

## はじめに

C.G. ユングが「たましいの医師」として治療実践に導入していた能動的想像は、「ユング心理学」の諸概念の根幹をなす。本論は、この能動的想像についてのユング自身とユング以降の言説を展望することを通じて、そこで前提されている意識の在り方とそれに対する能動的想像のアプローチとを再検討することを目的とする。

### 1. 能動的想像 (active imagination) とは

能動的想像とは、たましいの気分やその他の無意識の諸内容に何らかの形を与えて、それらと能動的に対話を試みていく方法のことを謂う (Samuels et al, p. 9-10; Hark, p. 77-79)。そうすることで、個々の意識生活において自分の無意識からの要求をも尊重しつつ自分なりの選択をし、個としての自分の生を自分のものとして生きていくことができると考えられている。このような考え方の背景には、無意識の作用は意識の在り方を補償するという目的論的な観点がある (Progoff, p. 181)。したがって、無意識の真の意味を意識化することでその作用を解消してしまうというのではなく、あくまでも意識生活での自分の立場は保持しつつ、それでも何とか無意識からの働きかけと折り合っていることが、一つの治療目標とされる。それは治療関係との議論で言えば、無意識の真の意味を解きあかしてくれる分析家に依存してしまうことなく、自分で自分なりの道を自分のものとして歩んでいけるということであろう。無意識とは、意識にとってはあくまでもわけのわからないままに自分の中で蠢きまた外からは自分を振り回す動きのことである。そのような動きに対して、その時々意識の在り方と対照しながら、自分にとってのその意味を見出し自分なりのやり方で意識生活に組み込んでいくことが必要とされるのである。

無意識の諸内容にどのような形を与えるかについては、治療者との関係とともに、実際に能動的想像をしようとする人の得手不得手や顕れ出てくる無意識のイメージが聴覚的なものか視覚的なものかといった点に依拠する。そして実際的には、そういったイメージに対して、それを文字にして書き留めるという方法が採られたり、絵や粘土・箱庭・コラージュ等の非言語的な媒体が

使われたり、さらにはダンス等の身体的な表現が使われたりしている。しかし、どのような媒体を使うにせよ、能動的想像の基本的な要素として次の四点が指摘されている。すなわち、①無意識を人物像や声等の内的なイメージとして招き出すこと；②それらの像と対話をし体験を共にしていくこと；③自分なりの価値観に基づいて、意識の側の倫理的な足場を定めること；④そこでの想像の過程を日常生活において具体的に統合すること；である (Dallett, p. 177; Johnson, p. 160; Spiegelman, 1982: 邦訳 52 頁)。これらは最初に述べたように、ユング心理学の諸概念の根幹に関わっている。無意識が人物像として表象されるという考えは、元型イメージに通じていくし、また後に議論するように、元型心理学で強調される「人格化 (personifying)」というイメージの仕方 (imagining) とも関わっている (Hillman, 1983 a)。また、無意識イメージとの対話が採り挙げられ、そこで意識の倫理的な立場が強調されるのは、イメージ世界は外的な物理的現実と同等の現実性を持つとする「こころの現実性 (psychic reality)」という考えに関わるものである。そして、お互いに相容れない意識と無意識とがいつ終わるとも知れない対話を続けていくうちに、両者の間に象徴という「第三のもの」が布置され、無意識からの補償作用を意識的な人格に統合していくことが可能になるとされる (Jung, 1916 / 1958, para. 189)。ここで作用していると考えられるのが「超越機能 (transzendente Funktion)」であり、後にセルフとして概念化される考えである。他方、この統合至上主義やセルフの一神論という考えの再検討 (re-vision) を促しているのが、J. ヒルマンが提唱する元型心理学 (archetypal psychology) である (Miller, 1974 / 1981; Hillman, 1971; 1975)。

このように、能動的想像をめぐる議論は、ユングの考えの核心に触れるものであり、また元型心理学が治療実践と直接に結びついていく形で再検討しようとしているところでもある。そこで以下の論述では、まず前述の四つの要素についてユング心理学での通常の考えを概観し、次いでそれらに対する元型心理学からの批判を検討していきたい。そしてそれらを通じて、能動的想像において背景となっている考えを西洋の意識構造との関連で明らかにしていきたい。

## 2. 能動的想像の実際

先に述べた能動的想像の四つの手順は、具体的には以下のように整理される。

まず第一に、意識的な思考を自我によって方向付けることをやめて、意識的には何も考えないボーッとした状態で、何らかのイメージや考えが浮かんでくるのを待つことが必要とされる。しかし自我は「常に助力したり、矯正したり、否定したりして、介入しようとし、どんな場合にも、魂の過程が単純に生成してくるのをそのままそっとしておくことができない」 (Jung/Wilhelm, 邦訳 47 頁)。そもそも自我にとっては、自分の統制の及ばないところで何か蠢いているということ自体が認め難い。だから、このような試みを始めることに対して、自我は様々な抵抗をする。

私が最初に能動的想像を始めたとき、私自身の抵抗との体験は教訓的であった。そのとき私は、能動的想像に入っていくためにかなりのプレッシャーの下にいた。しかし、何も産み出せないままにタイプライターの前に座り続けることが長期にわたった。私には能動的想像ができなかった。ある日、私がそこに座っていたとき、突然に私の左側にもう一人の「私」が座っているのが見え

た。彼女は話し続けていた。それで私は、彼女が言っていることを聴き、書き留めた。たしかに彼女には、能動的想像というこの作業全体がいかにも馬鹿げたものであるかということについて、とてもたくさんの言うべきことがあった。彼女こそが抵抗であった。私自身のまさに合理的な側面が人格化されて、この最も非合理的な過程とは関係したくないと考えていたのである。その瞬間まで私は彼女と同一化しており、彼女が言っていることを聞き、それと対峙し克服することができないでいたのである。(Dallett, p.189)

もちろん、無意識からの圧力があまりにも圧倒的で意識には受け容れられないがための「根拠のある抵抗」もある。しかし、近代的な自我が強固に確立された西洋の意識においては、自我の統制の及ばない自律的なこころの動きが存在するということが、しかもそれが外的現実と同様の現実感を備えているということは、なかなか認められない。だからこそ、自我の判断による取捨選択は避けて、無意識からのイメージ表現をひたすら待ち続けなければならないのである (Jung/Wilhelm, 邦訳 47 - 49 頁参照)。

第二に、そのようにして顕れ出てきた無意識の内容に意識を集中し、イメージが自発的に動き出すのを待ったり、それが語るところにひたすら耳を傾けたりしなければならない。この集中の作業にはかなりの心的なエネルギーが必要とされる。そして、そのイメージの中へ「私」が入って行かなければならない (Kirsh を参照)。そのイメージ世界が「私」をも包み込んでいることを理解し損なうと、意識と無意識とが折り合っていくための過程は始まらないままに先送りにされ、その世界は再び無意識へと後退してしまう (Hannah, 1981, ch. 3 参照)。なるほど当初は映画を見るように「傍観者」として始まる場合もある。しかし、そのイメージに即している限りにおいて、そのイメージに対する「私」の関わりはどうしても問題にされざるを得ない。しかも、その関わりは実感を伴うものでなければならない。イメージを「頭の中の絵空事」として片付けてしまうのではなく、「こころの世界での現実」としてそれを体験することが必要とされるのである。

何年か前に私がおもっていた患者は、能動的想像を始めるのにとんでもなく時間を要した。彼の外的な生活では彼にはまったく何も起こらないようであったし、同種の沈滞感が彼の想像にも持ち込まれていた。彼はまったくのからっぽであった。そこで私は彼に、私がするように〔想像の中で一訳者註〕海岸に行き、歩き始めて、周囲を見回し、誰に会うかを見ってみるように言った。

翌週彼は戻ってきて、次のように言った。「そう、海岸を歩いてみました。ですが、誰も私に話し掛けようとはしませんでした。何も起こりませんでした。」

そこで私は穏やかに驚いてみせた。「よくご覧なさい！ きっと何かが起こるはずですよ。あなたがたっぷりと海岸を歩くのなら、足に水脹ができるでしょう。病院に行かなければならなくなるでしょう。看護婦さんと恋に落ちて、結婚することになるでしょう。さあ、行ってやってみて下さい！」

次の週彼は戻ってきて、まったく真面目な顔つきで無表情に私を見て、次のように言った。「看護婦さんは全然魅力的ではありませんでした。ですから結婚もしませんでした。」しかし、彼は少なくともスタートは切ったのである。(Johnson, p.170)

意識はイメージ世界での出来事に対しても、外的な世界での出来事と同様の現実感を感じていなければならない。現実場面で書斎にライオンが入ってきたとすれば、まず動転して恐怖に駆られるのが通常の反応であろう。想像の中でも同様の反応が引き起こされてしまうくらいに、そこでの現実感を体験していなければならないのである (Johnson, p.174)。「空想の中でのライオンだから恐れる必要ない」と考えたり、「無意識がこういう形を取って何かを伝えようとしているのだから、それと話をしてみればそれでいいんだ」と考えてしまうのでは、イメージ世界に入り込んでそこでのイメージにそのままに即しているとは言い難い。身がすくんでただ動悸だけが激しくなるというように実感を伴ってそこでの出来事を体験するためには、それだけの意識によるその世界への関与 (commitment) が必要とされるのである。

このようにイメージが現実のものとして体験されるとき、そこでの出来事に対して意識は傍観者に留まっていることは許されない。意識は、自分自身の在り方に基づいて、何らかの応答 (response) をしなければならない。これが能動的想像の第三のステップで、意識に対して倫理的に要請される責任性 (responsibility) である。イメージ世界での出来事に対して「一体自分はどうするのか?」、どこかからの声による意見や要求に対して「自分はどのような結論を出すのか?」等、自分なりの決断が迫られるのである。「無意識とのほんとうの対決 (eine wirkliche Auseinandersetzung) は、無意識に対立する意識的な立場を要求する」(Jung, 1928, para. 342: 邦訳 151 頁)。これに続けてユングは、想像の中で自分の花嫁が氷面の裂目へと跳び込むのをそのまま見過ごしてしまった患者の例を挙げている。そして、「本人自身がこの話のなかで能動的な働きをしていない」ために、想像全体が夢のように非現実的になっていることが指摘されるのである。

意識の在り方を補償する作用としての無意識は、倫理的には中立である。したがって、イメージ世界においてもまた、人間的な道徳を考慮しない出来事が起こったり、非道徳的で法外な要求がなされたりする。自我はこれに対して、人間としての限界や自らの価値観を明確に打ち出さなければならない (Jung, 1961: 邦訳『1』264-265 頁を参照)。そこで両者が譲ることなくやり合っていくことを通じて、イメージ世界での出来事が、現在の意識の在り方にとって意味深い体験として「統合」されていく道が開かれることになる (Johnson, p. 189-195)。

そしてここで、第四のステップとして、内的なイメージに対する自分なりの決断を、外的な日常世界において生かしていくことが必要とされる。これは、内的なイメージ世界での出来事と外的な世界での対人関係とを混同して、内的な出来事に対して外的に応じてしまう「行動化」とは区別される<sup>1)</sup>。ここでのポイントは、イメージ世界での出来事に対して主体的に自分なりの決断を下した「自分」というものを、新たに外的世界において見直しておくことにある。イメージ世界で自分が下した「決断」を外的な対人関係に持ち出すのではなく、「イメージ世界において自分が自分なりの決断をしたということ」を日常世界において外的に証し立てすることが必要とされるのである。それは何も外的世界における特別な決意表明である必要はない。それまでの自分の意識の在り方や今なお護ることのできない自分の観点について、自分なりに振り返って見ることができる、ちょっとした儀式のような行いで十分なのである (Johnson, p. 97-134, 196-199 を参照)。「自己実現」を経て、理想的な素晴らしい人格に達するなどということは実際には稀であろうし、結局のところ、人間はそんなに劇的に「変容」するわけではない。だからこそ、自分

個人にとって意味のあるちょっとした証が重要になるのであろう。そして、そのような行ないやそこでなされたことが「象徴 (symbol)」と呼ばれる。それは、その時点での自分にとってぴったりとする感じをもたらすものであり、すべての意味はわからないまでも、何らかの形でそれまでの過程とこれからの道とを集約的に示すものなのである。

この点については、ボーリングンの「塔」をめぐるユング自身の体験が示唆的である (Jung, 1961: 以下の引用では邦訳の頁を記す)。彼は既に子供の頃から、自分の様々な想いを石に託す人であったようである。「私はいったい、石の上にすわっている人なのか、あるいは、私が石でその上に彼がすわっているのか。」(『1』39-40頁) 自分というものについて不確かで闇のような感じを引き起こすこの謎に魅せられて、彼はしばしばある特別な石の上に座ったものであった。そして、彼と石との対話は、小さな木でできた侏儒とその石をめぐる秘密を経て、後にはボーリングンの塔へと続いていく。「学問的研究をつづけているうちに、私はしだいに自分の空想とか無意識の内容を、確実な基礎の上に立てることができるようになった。しかし、言葉や論文では本当に十分ではないと思われ、なにか他のものを必要とした。私は自分の内奥の想いとか、私のえた知識を、石に何らかの表現をしなければならぬ、いいかえれば、石に信仰告白しなければならなくなっていた。このような事情が『塔』の、つまりボーリングンに私自身のために建てた家屋のはじまりである。」(『2』34頁) この塔は、「いつもそのときどきの具体的な欲求にしたがって各部分」が建てられていったにもかかわらず、「個性化の過程を具現するもの」であった(『2』37頁)。そして1950年、彼は間違っただけに届けられた石を「わたしの石」だと感じ、記念碑のようなものを作った。「一目みただけで、それは私にまったくぴったりしたものであり、その石で何かしたいと思ったからである。ただ、そのときにはまだ何なのかわかっていなかった。」(『2』38頁) 「石」が「私」に何かピッタリとした感じをもたらし、それで何かしたいと思わせるとき、イメージの中での「私」と「石」との出会いが始まっている。何が出来上がっていくかは単なる成り行き任せなのではない。そこには、事後的とはいえ、そのときどきの「私」の想いに対する厳密な意識化の作業が要請される。ユング自身によるその作業の結果は、次々と浮かんでくる言葉となり、碑文となった。「塔が私にとってなにを意味しているのか表わす」記念碑として、ユングの過去と現在と未来とを結びつけ、彼がしてきたことをまとめ上げる象徴となったのである(『2』38頁)。

前述したように、出来上がった記念碑という「物」が象徴なのではない。石とのぴったりとした感じを言葉として意識化し、外的な活動の中で文字として刻み込んでいった行為が、ユングによる石との能動的想像における第四のステップとして重要なのであろう。そして、意識と無意識との折り合いを象徴する行為は、長期の意識化の作業によってのみ、その一面が顕にされるものなのであろう。

以上、ユング心理学の真骨頂をなすと思われる能動的想像の実際の手順について簡単に述べてきた。それは、前述のように、ユング心理学の諸概念と「たましいの医師」としてのユングの治療実践(及びユング個人の体験)との接点をなす。そこで目指されているのは、意識が無意識と関係をもって対話を試み、お互いが折り合っているように議論を戦わせることを通じて、意識にとっての意義を統合していくことである。しかし、この「統合」という点については、ユング以降様々に議論されている。以下では、能動的想像においてどのように統合ということが語られ

ているかを検討し、次いでそれに対するヒルマンや M. ワトキンス (Hillman, 1983 b; Watkins, 1976, 1986) による批判を吟味しながら、能動的想像において前提されている西洋的な意識の在り方について議論を進めていきたい。

### 3. 能動的想像における統合

最も単純な形での定義によれば、「能動的想像は、無意識における諸々の力や人物像と交渉を始め、時に折り合いを付けるための機会を私たちにもたらすものである」(Hannah, 1981, p. 16)。ユングが言うように、交渉や折り合いを付けていくための議論は「自分自身の中に『他者』が存在しているのを認め」てこそ成立する (Jung, 1916 / 1958, para. 187: 邦訳 131 頁)。ここにおいて、無意識で蠢く諸々の動きを、自分とは異なる人格を有する「ひと」として想像し、しかも現実の「ひと」に対するのと同じように対していくことが必要とされる。「私はこれこれと思う」と語る代わりに、「彼が私の中でこんなふうに考えている」と語ってみるわけである (Hannah, 1981, p. 111)。そうすることで「私」は、私の中の「他者」と交渉をし、折り合いを付けていくための議論を始めるのである。その議論は、「私」が自分なりの結論を下すことでケリが着けられる。それは問題の「解決」ではないかもしれないが、自分なりの差当っての「決着」ではある (Jung/Wilhelm, 邦訳 44 頁参照)。ところで、「私の内なる他者」は文字通りには私の人格の一部分と考えられる (Johnson, p. 138)。この意味では、能動的想像は、人格の様々な部分にそれぞれの観点から話す機会を与えて対話をしていくこととも言えよう。そしてこの場合、そこでの様々な人物像や出来事による語り (narrative)<sup>2)</sup> は、「私の中」の様々な観点に基づく「私の語り」ということになる。イメージ世界での出来事や意見に対して「私の意識」に基づく応答を提示することは、「私」の私自身に対する責任としてなされなければならない。そのような主体的な決断によってこそ、様々な語りは私自身のものとして統合されていく。「人格化することは、それだけで既に、自律的な断片的体系のそれなりの相対的現実性を認めることであるし、ひいては、それがもっている生命力を同化し、非現実化していく可能性をもたらす」(Jung/Wilhelm, 邦訳 74 頁) のである。

しかし、この文章に続けてユングはまた次のようにも言っている。「最終的には、それは死においてのみ実現され得る理想なのである。無意識の力が生み出す現実の、また相対的に現実的な形姿は、その時に至るまで存在しつづけているのである。」(Jung/Wilhelm, 邦訳 74 頁) これは、本当の意味での統合がいかに困難であるかを示すものだと思う。実際 B. ハナーによれば、能動的想像における最終的な統合と実際の死とが表裏をなしている例が報告されている (Hannah, 1981, ch. 4)。このように考えると、「統合」を安易に語ることはできないことがわかるであろう。元型心理学によれば、「人格の統合」といった崇高な物言いそのものが、自我のインフレーションに基づくものなのである。イメージ世界での様々な語りを「私の語り」として引き受けていくことは、ともすると自我にとって都合のいい所だけを摂り入れた「自我のための騙り」を編み出すことになる。自我は英雄となり、問題の「解決」のために地下世界へと赴き竜退治をしようとする。「対峙」が「退治」にされることで、無意識と折り合っていく方向は、無意識と対決し制圧する方向へと歪められていく。先の R. A. ジョンソンの例で、看護婦さ

んとの結婚の方向が示唆されているのは、謂れのないことではない。このようにして、自我の優位性を保持するために能動的想像が使われる面があることを、ヒルマンは明らかにする (Hillman, 1983 b, p.114)。では、元型心理学において能動的想像はどのように使われていくのであろうか？

#### 4. 元型心理学における能動的想像

ユングが能動的想像を主題にした数少ない論文の中に『超越機能』(Jung, 1916 / 1958)がある。しかし、これは長い間ユングのファイル中に埋もれたままであった。J.M. シュピーゲルマンによれば、この論文をファイルの中から発掘し、ユング研究所でのテキストとして採用したのが、他ならぬヒルマンであった (Spiegelman, 1982)。ここからも明らかのように、ヒルマンの考えや実践においては、良きにつけ悪きにつけ、能動的想像という方法や超越機能という考えが大きな位置を占めていると思われる。

元型心理学において能動的想像が占める位置を検討するには、まずイメージ世界というものがどのように考えられているかを明らかにしておくしなければならない。H. コルバン (Corbin) によれば、イメージ世界 (mundus imaginis) は「どこにもない国」であると同時に、感覚世界や知性世界と同等の現実性を持って体験される世界でもある。このイメージ世界の現実性は、「私」の想像力を通じてそのまま尊重され実感されていかなければならない。この意味で、能動的想像において顕らかになるイメージ世界の住人やそこでの出来事は「私の中」での体験と考えることはできない。むしろ、「私」もまたそのイメージ世界の中の住人の一人にすぎないのである。

このように考えると、「統合」の名の下に自我がイメージ世界での様々な語りを所有してしまおうとする事態は容認されない。イメージ世界での様々な語りは、「イメージに即して (stick to the image)」(Hillman, 1977, p.68) そのままに認められなければならないのである。「想像上のお友達」と真剣に語り合っている子供の姿は、ある時期には日常生活でも稀ならず見受けられるだろう (Wickes, 第8章参照)。また子供の遊戯療法では、様々な登場人物の役柄を演じ分け、それぞれになり切りながらドラマを演出していく子供もいる。これらの子供に対して、そういった想像上の「ひと」を子供の人格の一部として統合させ、「発達」を促そうと考えることは無益であろうし、また危険であるかもしれない。それらはそのままに認められているうちに、いつのまにか表舞台からは姿を消してしまうのであって、「自我の発達」のために取り除かれるべきものではない。ここから明らかのように、「統合」を旗印にする自我は、発達や進歩といった「高み」へとまとめ上げることに躍起になっている精神 (spirit) に取り憑かれてしまっていると考えられる。

能動的想像におけるイメージ世界での対話について言えば、様々な他者がそれぞれの観点を自由に主張してやりあうのを、ハラハラしながらもそのままに措いておけることが重要なのである。そこでの出来事や議論を「私の中での語り」と考えて、その責任を取るために、仲介役を買って出てその解決を諮らうすると、自我のインフレーションを引き起こすことになる。そこではむしろ、仲介役をすることでその場を仕切りたがっている「私の気持ち」をさらに人格化して、その

場面に登場させてみなければならない (Watkins, 1986, p. 154)。もちろん、事態が益々ややこしくなり、それぞれが折り合っていくための議論はさらに紛糾することになるかもしれない。それに対して、「私」はただオロオロするだけで、惨めな無力感を味わうことになるかもしれない。ここにおいて能動的想像は、「私」が何らかの決断を願いながら結局ズルズルと何もできないままにただ劣等感のみを味わう過程となる。しかしそれこそが、ヒルマンの意図するところなのである。

ヒルマンによれば、治療場面での体験として第三のものが布置されるのは、クライアントと治療者とが何のためにその治療場面で出会っているのかについて確信が持てず、何となく不全感に襲われる時で、そういう自分の姿がどうしようもなく惨めに見え、お互いが劣等感を感じさせられる時である (Hillman, 1983 b, p. 86)。その第三のものは、問題の解決や決着へ向けての過程をまとめる象徴ではない。それはむしろ、「たましいは何を欲しているのか?」(Hillman, 1983b, ch. 3) ということを考えさせるきっかけとなる体験なのである。能動的想像において「私」は、自分の最も弱い面・醜い面を突き付けられ、惨めで劣った感じを味わわせ続けられる。これに対して自我が強権を発動して、不全感を埋め劣等感を解消しようとすることは、「私」の弱い面・醜い面から逃げようとしているにすぎない。「いかに統合するか? いかに超越するか?」といった問いは、惨めさから逃げだそうとしている自我の立場から発せられているのである (Hillman, 1983 b, p. 103)。劣等感に苛まれるとき、自我は何かをすることでそれを処理しようとする。ワトキンスによれば、その何とかしたがつている「仕切りたがり (Organizer)」すらも能動的想像を通じて人格化されていく (Watkins, 1986, p. 156)。そして、このように自我が相対化されていく中で、「私」は自分の惨めさを痛感しながらも積極的に「そこにいること」が要請される。「積極的」というのは、「たましいは何を欲しているのか?」について絶えず想いをめぐらせながらそこにいるからである。言うまでもなくそれには答はない。ヒルマンの主張では、むしろその問いを問い続けていること自体が癒しのフィクション (healing fiction) になるのである (Hillman, 1983 b, p. 105)。

これは、イメージ世界での対話で言えば次のようになる (Watkins, 1986, ch. 12 参照)。「子供」は、子供から見たそれまでの不遇を盾にして「母親」に法外な要求をする。それに対して「仕切りたがり」は自分の観点から、その「子供」の「子供っぽさ」にうんざりして不平を述べる。「子供」はまた自分の観点から、「仕切りたがり」の横暴を訴える。「私」はただそこにおいて、それぞれの主張を書き留めていく。そして「私」は、それぞれの主張の背後にある弱さをも感じ取っていなければならない。それは、劣等感を通じて自分の弱さを思い知りながら、なおかつイメージ世界の他者の弱さにも想いを馳せて「そこにいること」によってはじめて可能になる。ここに至ってこそ『私は、自分が今悩んでいるということを知っている』と冷静に言うことができる』のであろう (Jung/Wilhelm, 邦訳 45頁)。そして実際の生においては、イメージ世界において自分と共にいる様々な他者と折り合い、自分や他者の弱さを通じて自分を確かめながら、何とか主体的に生きていけることが大切なのであろう。このように、元型心理学における能動的想像は、「何とかしたい自我」を相対化し「積極的に想いを馳せながら (actively imagining) そこにいる私」へと向かわせる過程と考えられるのではないだろうか? しかし、そこでの「私」とは一体何者なのであろうか?



## 5. 能動的想像における主体

能動的想像の実施における「私」の在り方について、ユングは次のように述べている。

重要なことは、自分自身のあり方に対して断固たる肯定 *Jasagen* をすること、——つまり自分自身のあり方を最も重要な仕事として提示すること、そして自分のすることを常に自覚していて、その疑わしく思える面はすべて、常に眼前に見すえておくこと——これは真に骨髓に徹するほどの仕事である。(Jung/Wilhelm, 邦訳 50 頁)

よく言われるように、常に主語を明確にする言語に基づいて構造化された西洋の意識は、主体である「私」がしっかりと確立されている。そのような個が確立された意識性を持っていることによってこそ、能動的想像での困難と可能性とが裏付けられている。「精霊とは幻である、とあらためて自分自身に確信させるよりも、西洋人の場合は、まずこの幻の現実をもう一度経験しなくてはならない」(Jung/Wilhelm, 邦訳 72-73 頁)。このためには、能動的想像を始めるにあたって次のことが「私」に要請される。すなわち、「私」は一方で、イメージ世界が顕れ出てくるのに際して「私の自我」による統制や操作を排さなければならない。しかし他方で、「私の意識」による集中を通じて自分の内外で蠢く無意識の作用に形を与え、そこでの体験を実感できるように積極的に関わっていかなければならない。さらに「私」はまた、イメージ世界での対話や出来事を実感していく「私」の体験を書き留めていかなければならないのである。

イメージ世界での現実を体験し味わっている「私」を見ている「私」——このような「私」の二重化は、「私」という意識が言語に基づいていることに由来すると思われる。何らかの体験をしている「私」の姿は、他者の言葉を通して「私」へと映し返されて「私の体験」となる。「私」は、言語によって分節化された現実において構成されていくのである<sup>3)</sup>。そうである限り、「私」が「私」を対象化するという事態は避けられない。「私」とは何か? と問うている「私」とは何か? と問うている「私」とは…。R. D. レインが言う「結ばれ (knots)」である (Laing, 1970)。

良きにつけ悪きにつけ、能動的想像は、言語を通じて自らを対象化する意識の構造にその多くを負っている。だからこそシュピーゲルマンは、自らの能動的想像において次のように言うのであろう。

その秘密は「私」なるもの、ちっぽけな私なのだ。いいや、あなたの「私」ではなくて、私の「私」なのだ。私の「私」の特別性を宣言する。おお、痛み、おお、苦悩、おお、肉の傷よりも大きな魂の傷よ。

どこに行けば自分から逃れられるのか。どこに隠れることができるのだろうか。質問しても無駄だ。なぜなら質問するのは常に私だからだ。(Spiegelman, 1985: 邦訳 189 頁)

このような「私」をめぐる「結ばれ」は、論理的には何も生み出さない。まさに「第三ノモノハ與ヘラレズ」という排中律による死産となってしまう (Jung, 1916/1958, para. 189: 邦訳

132頁)。しかしここにおいて、能動的想像での人格化は、単に言語による繰り込み構造を重ねていく論理的な迷宮とは異なる面を示す。「私」とは異なる「ひと」と折り合っていくことは、論理の応酬とは違った、情緒の交流を可能にする。相手が論理でなく「ひと」である限り、「どんな感じの人物なのか？」とその「ひと」をめぐるであれこれと想いを馳せることができるのである。「これこれのよう」という表現はメタファーである。このようにメタフォリックにイメージ世界の他者と関わっていくことによって、「私」は多元的な現実を実感していくことができるのであろう。

## おわりに

以上、能動的想像は、「私」というものが確立された西洋の言語的な意識が、「何かをしたい自我」から「たましいについて想いを馳せながらただそこにいる私」へとその在り方を移行していく過程として考えられることが議論されてきた。それを通じてこそ、西洋の中心統合型の意識(河合)は、イメージ世界の現実性を実感し、現実の多様性を体験していくことができるのである。

しかしここから翻って、日本人にとっての能動的想像について検討しておく必要が生じる。河合が言うように日本人の意識の在り方は西洋人のそれとはまったく異なっている。この意味で、この世での世間様やあの世での先祖様との関係が曖昧なままに済まされている日本人の意識の在り方にとって、この方法をそのまま用いることは不可能で、むしろ危険でさえあることは繰り返し強調されなければならないであろう。

## 註

- 1) この点との関わりで、日常生活に実在する人物が能動的想像に登場してくるのを認めてはいけな  
いと言われている。Hannah, 1981, p. 12, 及び Johnson, p. 197 を参照。
- 2) ここでの語りについての考えは、アメリカの精神分析家 R. シェイファーに依拠するところが大き  
い (Schafer, 1976; 1983)。彼は、分析場面での患者の語りを患者自身の主体的な語りとして  
捉えていくための言語論を展開している。ワトキンスは、彼がイメージ世界での対話を「私の語  
り」として統合していく方向を目指している点を批判している (Watkins, 1986, p. 27-29)。
- 3) 言語による反省的意識と「結ばれ」との関連については、拙論を参照。

## 文 献

- Corbin, H. (1972): *Mundus Imaginalis or the imaginary and the imaginal*, *SPRING* 1972, p. 1-19.
- Dallett, J. (1984): *Active imagination in practice*, *JUNGIAN ANALYSIS*, ed. by M. Stein, p. 173-191, Shambhala Publications.
- Hannah, B. (1953): *Some remarks on active imagination*, *SPRING* 1953, p. 38-58.
- Hannah, B. (1981): *ENCOUNTERS WITH THE SOUL-Active Imagination as developed by C. G. Jung*, Sigo Press.
- Hark, H. (1988): *LEXIKON JUNGISCHER GRUNDBEGRIFFE*, Walter-Verlag.
- Hillman, J. (1971): *Psychology — monotheistic or polytheistic*, *SPRING* 1971, p. 193-232.
- Hillman, J. (1975): *RE-VISIONING PSYCHOLOGY*, Harper & Row.

- Hillman, J. (1977): An inquiry into image, *SPRING 1977*, p.62-88.
- Hillman, J. (1983 a): *ARCHETYPAL PSYCHOLOGY—A Brief Account*, Spring Publications.
- Hillman, J. (1983 b): *HEALING FICTION*, Station Hill Press.
- Johnson, R. A. (1986): *INNER WORK—Using Dreams & Active Imagination for Personal Growth*, Harper & Row.
- Jung, C.G. (1916 / 1958): Die transzendente Funktion (The transcendent function (1916 / 1957), Collected Works of C.G. Jung vol. 8, para.131-193.) (『超越機能』松代洋一訳, 『創造する無意識』(朝日出版社, 1985) 所収。)
- Jung, C.G. (1928): Die Beziehungen zwischen dem Ich und dem Unbewußten (The relations between the ego and the unconscious, Collected Works of C.G. Jung vol. 7, para.202-406.) (『自我と無意識の関係』野田倬訳, 人文書院, 1982.)
- Jung, C.G./Wilhelm, R. (1929): *DAS GEHEIMNIS DER GOLDENEN BLÜTE—ein chinesische Lebensbuch* (『黄金の華の秘密』湯浅泰雄・定方昭夫訳, 人文書院, 1980.)
- Jung, C.G. (1961): *MEMORIES, DREAMS, REFLECTIONS* (『ユング自伝—思い出・夢・思想—1・2』河合隼雄・藤縄昭・出井淑子訳, みすず書房, 1972 / 1973.)
- 河合隼雄 (1991): 「解説」, D. L. Miller (1974 / 1981) の邦訳『甦る神々』に所収。
- Kirsh, J. (1955): “Journey to the moon”—a study in active imagination, *STUDIEN ZUR ANALYTISCHEN PSYCHOLOGIE C. G. JUNGES I*, Rasher Verlag.
- Laing, R. D. (1970): *KNOTS*, Penguin Books. (『結ばれ』村上光彦訳, みすず書房, 1973.)
- Miller, D. L. (1974 / 1981): *THE NEW POLYTHEISM—Rebirth of the Gods and Goddesses*, Spring Publications (『甦る神々—新しい多神論—』桑原知子・高石恭子訳, 春秋社, 1991.)
- Progoff, I. (1970): Waking dream and living myth, *MYTHS, DREAMS AND RELIGION* ed. by J.Campbell, Spring Publications.
- 齋藤 眞 (1990): 「結ばれについて」, 『青年期, 美と苦悩』(大東祥孝・松本雅彦・新宮一成・山中康裕編, 金剛出版) 所収。
- Samuels, A. Shorter, B. & Plaut, F. (1986): *A CRITICAL DICTIONARY OF JUNGIAN ANALYSIS*, Routledge & Kegan Paul.
- Schafer, R. (1976): *A NEW LANGUAGE FOR PSYCHOANALYSIS*, Yale University.
- Schafer, R. (1983): *THE ANALYTIC ATTITUDE*, Basic Books (第14章は「精神分析の対話における語り」として新妻昭彦の邦訳がある。『物語について』(ed. by W. J. T. Mitchell; 海老根宏他訳, 平凡社, 1987) 所収。)
- Spiegelman, J. M. (1982): The knight (『能動的想像法の力』町沢静夫訳, 『ブンケー3号』(思索社, 1984) に所収。)
- Spiegelman, J. M. (1985): The ronin, *BUDDHISM AND JUNGIAN PSYCHOLOGY* by J. M. Spiegelman & M. Miyuki (『浪人』『仏教とユング心理学』(目幸黙櫻監訳; 森文彦訳, 春秋社, 1990) に所収。)
- Spiegelman, J. M. (1989): Active imagination and story-writing—individuation and art, *JUNGIAN PSYCHOLOGY AND THE PASSIONS OF THE SOUL*, Falcon Press.
- Watkins, M. (1976): *WAKING DREAMS*, Spring Publications.
- Watkins, M. (1986): *INVISIBLE GUESTS—The Development of Imaginal Dialogues*, Analytic Press.
- Wickes, F. G. (1927): *THE INNER WORLD OF CHILDHOOD—A Study in Analytical Psychology* (『子ども時代の内的世界』秋山さと子・國分久子訳, 海鳴社, 1983.)

(邦訳のある引用文では, 原文を参照の上一部訳語を変えさせていただいたものもある)

(博士後期課程)